園長のまなざし

第5回

手をつなぐことから

栃田正子

「あ、園長先生。Bちゃんどこにいるか知らない？」

「そうか。......じゃ、一緒に探そう。A子は、気持ちを
新たにするようにそう言って、私と手をつなない。
」「そう。一緒に探しましょう。A子のほうがつなない
でくれた手の感触がうれしくて、私も指の先まで気持ち
を込めて、手をつなぎ返した。

私は子どもと手をつなぐことが好きで、よく自分か
らのようにするのだが、自然につなげ手の関係
は心地よくて温かい。そしてこの心地よさは、自分
の幼稚園時代の原体験につながっていく。多くを覚え
てはいない幼稚園の日々ではあるが、やや暗めの園の
廊下で先生と手をつないでいたときのことはよく覚え
ている。そのとき、私はまったく安心した気持ちで心
地よかった。今、私が子どもたちと手をつなぐことを好むのは、ここに住む子どもたちに今も息づいているからだろうか。A子の「今」は、後の日まで残っているのだろうか。

幼稚園の環境が、在園のすべての子どもたちにとってもろんのこと、共に生活を創っている保育者たちにとってもそれぞれにふさわしく温かく心地よいものであるようにと願う。単なる平穏の温かさではなく、心や体に自由に動いてかかわり合うように心地よい状況が生まれ、一人ひとりが新しい自分に変わっていく育みの温床の心地よさ、温かさを期待するのである。

園庭が見渡せるテラスまで来たとき、A子はふっとつないだ手をほどき、わたし、お庭で遊んでくる。

園長先生、Bちゃんに会ったらそう言っていたと、言って走り去った。さっきとはまった違う、新しいA子の後姿であった。

（東京都 田場幼稚園）